

## 研究経過報告

池田博和

登校拒否問題については、われわれ共同研究グループの成果として一昨年の本紀要に第一報を載せたのに次いで、昨年の紀要には、具体的な事例検討にもとづいて第二報「“タテ関係からヨコ関係への発達における挫折”としての登校拒否」、第三報「女子における治療契機としての女性性受容」を報告することができた。また、この概要は昨年の日本教育心理学会第30回総会（鳴門教育大学）で発表した。

本年は第四報として「登校拒否における身体性の問題」をまとめる予定であったが、これはなかなか難しいテーマであり、締め切りまでに十分煮詰めることができず、見送らざるを得なかったのは残念であった。いずれきちんと形を整えたいと思う。登校拒否に関しては、この他「母親面接の問題」、「学校の対応の問題」等さまざまな主題が控えている。

最近、教育研究特別経費によるプロジェクト「キャンパスの精神的健康増進に関する研究」にとりくむなかで、現代学生の精神的特徴を検討するためにいくつかの「新人類」論を読んでみたが、とくにその社会学的分析には首肯しうるものが少なくなかった。これらの論から登校拒否問題その他の青年期危機論を考えてみるのも興味深そうな主題である。

本年の学生相談研究会議仙台シンポジウムでは、達成

主義と女性性の目覚めとの断絶をめぐって危機的となり、無気力状態と摂食障害の症状を呈した女子学生の事例を通して、とくに優秀な達成をなしてきた女子学生の今日の問題を検討した。

なお、この文脈では、以前香川シンポジウムで発表した事例についての詳細を“STUDENT APATHY の一事例 —「青年期危機」論の視点からの検討— 上、下”と題して、本学部教育心理相談室紀要に昨年度（第3巻）と今年度に分けて掲載した。

ロールシャッハ法に関する研究としては、朝倉書店から刊行される木村 敏他編『精神分裂病—基礎と臨床—』の「診断—心理テスト」の節を報筆した。近いうちに日の目をみるはずである。

また、特定研究との関連では、「教育場面における人間関係の研究」の一環として生徒の自主性・自律性をたかめる非常にユニークで意味深い実践を行ったある中学校の試みについて、そこの教師たちと共同研究を本年の東海心理学会で発表した。これもやがて報告書にまとめなければならないが、とくに一点だけ強調しておけば、この実践で生徒指導の原理として重要な意味をもっていたのは、カウンセリングの技法ではなくて、その思想であったということである。

（平成元年10月）